
樽山匠のにぎやかな日常

ノンキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

樽山匠のにぎやかな日常

【著者名】

ノンキ

【作者略】

ノンキ

ノンキ

【あらすじ】

この地域でトップレベルの進学校、柵の丘高校に進学した樽山兄弟とその周りの人間が織り成すドタバタ小説。どんな事になるやら

…。

* 更新はきまぐれですので、とても遅いのよろしくお願いします。

メインの登場人物（前書き）

こんなものを書きました。よろしくおねがいします。

メインの登場人物

樽山 匠

たるやま たくみ

本作の主人公。勉強しなくてもテストで100点取れる意味不明な天才。

ケンカに強く、柵の台第三中学の守護神として不良からおそれられた存在。

高校生になり柵の台高校に進学する。

好きな食べ物はラーメンを中心とした麺類。

父親と母親が中学生の時から長期海外出張に出かけているため、妹の恵と一緒に暮らしている。

樽山 恵

たるやま めぐみ

匠の双子の妹。さすがに兄よりは劣るが勉強とケンカに強い。

そつちよりスポーツのほうが得意である。

兄と同じく柵の台高校に進学した。

好きな食べ物はカレーで、中三の時晩御飯のメニューで大喧嘩した履歴をもつ（その時はカレーラーメンになつた）。

メインの登場人物（後書き）

作者は初心者ですのでとんでもない事を書くかもしれません。その時はよろしくお願ひします。

1話 入学式

暖かな日差しが窓から差し込み、体育館に光をおとす。こうなつてくると眠くなるのは必然だ。とくにまだ寒さが残り、さらに殺人的な麻醉力を誇る校長の話を聞いている最中ならなおさらだ。

「であるからして……」

まだ続くのか。すでに新入生の3分の2はねてるぞ。隣に座る妹を見ると、案の定寝てる。

「とりあえず、校長として入学おめでとうと言つておきます。」

……やつと終わつたか。昔から思うが偉い人はなんで長話が好きなのだろうか？周りを見るとさすがに何人かは起きてきた。妹もそろそろ起こすか。

「めぐみー。おきるー。」

…起きない。魔法の言葉でも使うか。魔法の言葉といつても簡単だ。こいつの好物を言えばいい。

「カレー。」

言つてすぐ（0・5秒後）にガバッと起きた。

「……私寝てた？」

「寝てた。」

すると僕の隣で

「校長の話が始まつて1分で寝てたぞ。」

……頭が痛い。

僕は樽山匠^{たるやまたたくみ}。今日からここ、柵の台高校に通う高校1年生だ。

家族構成は僕と双子の妹の恵^{めぐみ}、それに両親だが、両親は海外で仕事をするので中学のときからほとんど家にいない。あと隣町にいとこがいる。このいとこは恵にとてもよく似ているが、中身はしっかりした子である。

友人関係は…悲しい事にこの学校で知つてゐる人がいない。…まあなんとかなるだろう。

さて僕と妹の詳しい紹介だが、僕と妹は双子といつても見た目や中身は正反対だつたりする。たとえば好きな食べ物で、僕はラーメンが好きだが、恵はカレー好きである（この前晩御飯作るときに、どちらも譲らず、結局カレーラーメンになつたときがあつた）。

ほかにも容姿は僕が父さんそつくりで恵が母さんそつくりだ。ただ髪の色は僕が母さんと同じ明るい茶色で恵が父さんと同じ黒である。ただ髪の色に関してはあまり触れたくない。理由は髪の色で中学生の時生徒指導の先生と大喧嘩したことがあるからだ。

まあこんなとこかな。

かつたるい入学式が終わりH.R.も終わつて（案の定担任の先生と髪の色でもめた）後は帰るだけである。明日からは1-Dに通う事になる。なんて考えてたら後ろから肩を叩かれた。誰だろ？と思つて振り返つてみると髪がぼさぼさの青年が居た。

「よう。久しぶりだな、匠。」

……誰だっけ？

「忘れたのかよ。ほら、小学校でよくケンカした…」
思い出した。こいつは小学校の時仲が良かつた野島謙一だ。たしか中学校は第一中学に行つたはず。こいつもケンカが強くてよくケンカをしたもんだ。

「久しぶり謙一。しばらく会わないから忘れてた。」

「忘れるなよオイ。まあいいや。ところで恵ちゃん元気？」

元気すぎて疲れるというとあいつは大笑いした。

「にじちゃん。帰ろう。あれ、たしか…謙一君だっけ？」

「誰かさんと違つてすぐ思いついたね。」

その誰かさんはそっぽを向いてごまかした。

「久しぶりだね。第一中はどうだったの？」

その後しばらく雑談したり、メアドを交換したりしてから二人で帰り始めた。ああ、知り合いが同じクラスにいて良かった。うんこれから楽しくなりそうだ。

「やついいえぱお匂じうする？」

…あ。

1話 入学式（後書き）

なんかぐだぐだです。こんなのでよければ読んでやつてください

2話 結成！柵の台高校探偵俱楽部

入学式が終わって1ヶ月経つが、僕も恵も部活に入つてない。理由は単純だ。出来るものがまったく無いからだ。

陸上部＝走るのは得意だが、それは競技としてではなく、妹を追いかけているためだ。

その他運動部＝ルールがわからん（一般常識程度には知っているが）。

文芸部＝文才がない。

英語部＝なんで海外に行かないのに英語漬けになんなくてはいけないのだ。

軽音楽部＝楽器が弾けない。etc - etc。

そんなわけで現在兄妹そろつて帰宅部。

「そんなんじや、だめじやん。2人とも中学の時何やってたんだよ。な質問があつた。

「「帰宅部で～す」」

「……揃つて言うな。」

「そういう謙一はどうなのよ？」

恵が反撃に出た。

「僕？僕は生徒会。」

恵、あつさり撃沈。

「おまえはすごいよなあ。生徒会をやるなんて。」

僕が感心していると

「それでもないよ。」

と当たり前のように言った。なんか悔しい。

お昼を食べ終わると僕は恵と相談した。

「まず、どうするか。」

「新たに作るとかは？」

それはいい考えだ。この学校、「クラブ設立の届け出」という用紙を出すだけで認められる。ただ僕らには問題があった。

「人数3人もいなのにどうやって出すんだよ。」

この学校のクラブ設立の条件は3人以上集まる事だ。集まらない事にはクラブとして認められないし、活動も出来ない。

「勧誘すればいいじゃん。勧誘活動は例外だよ。」

……忘れてた。そうすれば良かつたじゃん。恵よ。あなたはそりやつてアイデアを述べてつて下さい。

「よし。じゃあ勧誘はするとして、まずはどんなクラブにする？お茶会しておしゃべりで終わらせる。」

どこの軽音部だ。だいたいあんなことして学校が黙つてるのがすげえよ。ああにしてもなんで最終話なんだろう？

「…何の話？」

ずっと聞いてた謙一が質問する。

「ん？まあ某アニメのネタ。」

「よし、おまえアニメ研究会入れ。」

何だよソレ。僕はアニメオタじやねえつつ。

「ついでにお前たちの好きなものは？」

なんだろう。料理かな？あつもつと好きなものがあつた。

「何だ？」

「ミステリーだ、ミステリー。」

てな訳で翌日（なにがてな訳でだ）。僕らは「ミステリー研究会（仮）」のポスターを作り、掲示板に張りつけた。あとは教室で待つのみ。

「来ないね。」

…全く来ない。」この学校やっぱり部活数が文化系だけで50を超えるというし、やっぱり駄目かな（てか、まくら投げ愛好会とかつて文化系なの？）。

「諦めるか。」

「そうね。」

窓から夕日が差し込んできたし、そろそろ夕飯の時間だ。さて帰ろうと思つた時、教室のドアが開いた。

「あの～、ミステリー研究会の人ですか？」

「……はい。そうですけど。」

どうしたんだろう。まさか生徒会が動いたか！？こうなつたら奥の手をつかうか。つて何やつてんだ僕は（それより奥の手つて）？「あの、ここに入部させて下さい。」

……これは夢かな？いいや夢じゃない。てことは、だ。

「熱烈大歓迎します。」

「は、はあ。」

「え～っと、自己紹介して。

「えっと、1年A組の石山 友也といいます。よろしくお願ひします。」

「丁寧だなあ。

「うんよろしく。僕は1年D組の樽山匠。いつも同じく1年D組で、妹の恵だよ。」

「へえ。双子さんですか。」

とまあこんな話をしていたら突然謙一が飛び込んできた。

「ミステリー研究会という名称、変えて。」

話を聞くと他の人がさつさと申請してしまつたらしい。てかおい作者。おもいつきり省略するなよ。

「どうする？」

「どうするって、名前変えるしかないだろ。」

「でもどんな名前がありますか？」

それが問題だ。どうしよう。出来れば人が揃つたことだし今日中に決めたい。

「柵の台探偵事務所とかは？」

恵よ、いつから僕らは探偵なんだ。あつ、そうだ。

「よし、考えたのを発表する。」

一人がこっちを向く。そして発表した。

「名前は、柵の台高校探偵俱楽部だ。異議のある人は？」

「意義な~し。」

とまあこんな感じで話が決まった。明日から探偵俱楽部は本格的に活動する。楽しみだなあ。

2話 結成！柵の台高校探偵俱楽部（後書き）

なんとかかけた。次も頑張ります。

3話 探偵倶楽部の活動（前編）（前書き）

なんとか3話目です。苦情、誤字・脱字があったらドンドン指摘して下さい。

3話 探偵俱楽部の活動（前編）

さて柵の台高校探偵俱楽部が正式に部活として認められて一ヶ月。毎日柵の台高校の図書室で事件に立ち向かう…訳もなく、平和で退屈な日常を、推理小説を読んだり、面白いミステリーを紹介し合つたりといつ毎日である。なんかとある女子校の軽音楽部見たいな感じである。違うところはお茶とお菓子がないところである。

「そんなんでいいの？」

謙一が突っ込んでくるがしそうがない。探偵俱楽部と言っているが事件は早々無いんだし、第一校内の事件は風紀委員や治安維持部が何とかしてくれるだろ？。

「まあそうだけどね。」

この学校、校内の治安維持はクラス内から1名選抜される風紀委員と、志願者からなる治安維持部が担当している（大きな事件は当たり前だが教師が担当する）。まあほとんど事件は無いわけだが。

「それよりこの前テレビ見てたらさあ…」

恵よ。少し騒がしい。あといきなり話変えるな。

放課後

図書室の隅っこにある推理小説コーナー。ここにあるテーブルが柵の台高校探偵俱楽部の活動場所だ。

「ミステリー読んで思うんですけど、まず思う事はなぜ刑事課が殺人課とかにされているのが不思議なんですね。」

「話すのは部員の石山友也君だ。僕と恵は友也と呼んでいる。

1ヶ月経つうちに僕らはすっかり親しくなり、今じゃお互いを名前で呼び合う仲までになつた。

「まあそれは仕方がないんじゃない？捜査一課といつてもわかんない人はいるわけだし、あるいは警察がわからぬ素人が書いたもの

かもしれないし。」

「でも殺人課は無いと思うよ。それじゃあ毎日そのあたりで殺人事件があるみたいだし。」

まあこんな話をして一口を終わらせる。

ただたまにミステリーとは関係ない話をする。例えば「テレビでやつてたマジックで…」

とか

「この間うちのクラスの奴で…」

とか言う話をして帰るときもある。こんな毎日が続けばいいが（謙一的には良くないだろうが）、突然狂う時がある。今回は僕たちが動かざるを得ない状況になつた話である。

「さて帰りますか。下校時刻だし。」

雨と湿気が大気を支配する6月のある日、いつものように雑談して帰ろうとしたら図書室に珍客が飛び込んできた。

「あれ、謙一。どうした？」

図書室に飛び込んできたのは今生徒会室に居る筈の謙一である。「知り合いでですか？」

「ああ友也は知らないんだ。

「小学校の時の友達で、同じクラスの野島謙一君だよ。」

「野島謙一です。君が探偵俱楽部の友也君ね。よろしく。」

「そう言つと謙一はにっこり笑つた。

「あっ、じつじそこよろしくお願ひします。」

一通り自己紹介を終えた所で本題に入る。

「実は生徒会のほうで探偵俱楽部の存在意義が問われているんだ。」「存在意義？」

「おもに田立つた活動はしていないし、図書室占領するのは良くないと文芸部から苦情が来てるんだ。」

あつちの場合、すぐに資料が手に入る図書室で活動している僕ら

に嫉妬しているだけだろう。

「というわけでどうするか。」

謙一が生徒会に帰った後に僕らは会議を開いた。
「文化祭でミニステリー発表するとか。」

これは友也の案。

「…お客が来ると思う?..」

「…おもいません。」

だよね~。

「じゃあどうするのよ。」

それを今考えているんだろ? 突っ込んだ時に
「あの~。」

後ろから話しかけられたので振り向くと、そこには背の高い女子
がいた。ボウタイの色からして3年生かな?

「(ル)、探偵俱楽部ですよね。」

(ル)は僕が答えるべきだろ? 一人を見ると我関せずという顔
をしている。溜息…。

「実は猫がいなくなつたので探してほしいのですが。」

うちらは某アニメの少年探偵団か? 突っ込もうかと思つたが止め
といだ。

こうして、柵の台高校探偵俱楽部初の活動が決定した。

3話 探偵俱楽部の活動（前編）（後書き）

学校が始まったので更新が土日、祝日のヒマな日だけになります。
ですので更新がとても遅くなりますので、了承ください。

4話 探偵倶楽部の活動（後編）（前書き）

大変更新が遅れて申し訳ありませんでした。

4話 探偵俱楽部の活動（後編）

探偵俱楽部結成最初の活動は、先輩の飼い猫探しになつた。正直言つて、そのうち帰つてくるんじゃないかと思つた。

「でも一週間も家を空けることなんて今までなかつたんで心配なんですけど。」

それは心配するだらうな。先輩の話を聞いてそう思つた僕だつた。「集会場は探しましたか？」

「ういえ、猫は一定の場所に集まつて集会をするといつのを前に聞いた事がある。

「でも夜中とか、そうでなくとも翌日には必ず帰つてきたので。それに探しましたけどそれらしき猫は居なくて。」

それもそうだ。まず飼い主だつたら普段行く場所をさがすよな。とここで重要な事に気がついた。そうだよな。聞かなくてどうする。「まずあなたの飼い猫の特徴とかありますか？」

「つしろで部員一人が「あ、うつかりしてた」と顔をする。またく、特徴もわからぬのにびりやつて探すつもりだったんだ。やれやれ。

「いや、匠（兄ちゃん）が言えた立場じゃないから。」「

見せてもうつた猫は普通の二毛猫だつた。首輪が赤で、特徴といえばそれぐらいだつた。ただ眼が細い。

「生まれつきなのか買つた時から目が異常に細いんです。ただ盲目とこつ詰ではないそうです。」

よく見えるな。それとも心の眼とこつやつなのか?ばあちゃんで

も習得しない…

「もどつてこい。」

友也が自分の世界から戻してくれた。

「いなくなつた時どうなつていたんですか？」

自分の世界に行っている間に恵が聞き込みをしていた。

「私は学校に行っていたので詳しい事は解りませんが、母が言うにはいつも散歩に行く時間に出て行つたきり帰つて来なくなつたそうです。いなくなつたと知つた時は近所の動物病院に猫の事故がないか訊いてみましたが、そんな事故は無いそうです。」

まったく面倒な失踪事件だ。まあ探してほしいと頼まれたからには探すしかない。というわけで僕らは明日から猫の搜索をすると先輩に行つて、毎日ここに来て貰つようと言つと、僕らは帰宅した。

「しかし探し出すことが出来るかねえ。」

現在下校中。恵と一緒に今回受けた内容を考えていた。歩いている場所は幹線道路で、よく様々なトラックが真横を通る。

「まあやつてみなきゃ分かんないじゃない。ともかく先輩の家は柵の台2丁目らしいし、そこから重点的に探しましょ。」

翌日の放課後

さつそく僕らは柵の台2丁目を中心に猫の搜索をした。搜索の仕方は聞き込み、路地を通る、塀の上を見る等々。でも見つからない。一軒ずつの家に聞き込みしても、猫なら通れそうな路地を見ても、2丁目に限らず柵の台地区全域を探しても見つからなかつた。そうこうするうちに一週間経つてしまつた。先輩はまだ見つからない事に少しイライラしているようだ（当たり前か）。

「本当に見つかるんですか？」

相手に威圧をかけるような言い方がかえつて怖い。なんかここ

空気が一気に100tの重りに変わったように重くなつた。

「なんだ。まだ見つからないのか。」

いきなり話しかけるな謙一。読者がビックリする。

「まあいいじゃないか。どんな状況…ってあれ?」

謙一が猫の写真を見て首をかしげる。

「知ってるの?」

「たしか3日前に花の台のほうへチャリで出かけたときに見かけた

ぞ。たしか花の台5丁目の魚屋に居た氣がするけど…。」

既に謙一の言葉は耳に入つてこない。僕らと先輩はいそいで花の台5丁目の魚屋に向かつた。

「その猫はたしかに家で預かつてあるよ。あ、ほら。散歩から帰つてきた。」

魚屋の店主に言われて振り返ると、そこには

「三毛太!」

三毛太といふのが、その猫は。たしかに写真で見たとおり目が細い。

まあ探偵俱楽部が見つけたわけではないが、結果的に猫が見つかつたのでよかつたよかつた。

「で、結局廃部は免れたのかな?」

「…どうなんだろう。」

5話 テスト前（前書き）

伝説・改先生、かつてに先生の小説ネタ出して申し訳ござりません

5話 テスト前

「」の間の「迷える子猫」事件（命名権）が解決してしばらく後の話である。

僕ら探偵俱楽部は図書室の隅っこで相変わらずだらだら過ごしている。まあ事件があつたらあつたで忙しいし、無かつたら無かつたで逆に暇だ。部室があれば私物の持ち込みが出来るのだが、あいにくこの学校、俱楽部の数がとても多い。設立方法は簡単だし、第一顧問の先生も要らない。

そんなこの学校では、部活動の存続競争が激しく、予算会議で相手のクラブを潰して自分のクラブに少しでも多く部費をもらおうと頑張る（もつと違う事を頑張れよと言いたくなるのは僕だけだろうか？）。まあ我が探偵俱楽部は部費が要らないので（あっても使い道がない）いくら予算要望会議で罵詈雑言を浴びようがどうってことのない部活である。

「でも合宿は行きたいよ。」

「…なにしに合宿へ行くのだ、友也よ。まあ部費より部室が欲しいが、まず無理だろう。そんな事を考えていたらそばのテーブルに謙一が座っていた。

「あれ、なんで謙一君が此処にいるの？」

愚問だ。読書しにきた……わけではなさそつだ。教科書とノートを広げて何やつている。

「おまえら、明後日は期末試験だぞ。」

……キマツシケン？なにそれ、おいしいの？

「…現実逃避するな。」

「でも兄ちゃんの場合は勉強しないでテスト百点だったから大丈夫じゃない？」

まあたしかにそつだつたけど…ってなんか友也と謙一が見ている。
しかもなんか殺氣が感じられるよくな…。

「「ゆるせ…………ん……」」

「わ…………?」

「いきなり一人して飛びかかつてきた。

「ちよつとまで！なぜ襲う！？」

「勉強せずに百点は人類の敵じゃ…………」

「殺せ殺せー！機関銃を打ち込め！！」

「ちよつと謙一君、落ち着いて。友也君も…ってキヤーなんか周りの人も…。」

「あいつを殺せ…………！」

「地球から追い出してしまえ…………！」

「落ち着けー！」

「…………落ち着けるか…………！」

「ひー、図書室で慣れブルゴウア」

図書室の先生が止めようとしたが巻き添えを食いついて吹っ飛ばされてしまった。

「…………申し訳ございませんでした…………」

「…………」

図書室内暴動事件（命名権）は先生だけでは收拾がつかなかつたので風紀委員と治安維持部が特殊部隊を編成し、図書室を完全封鎖した上で突入。突入開始から10分後、暴動は鎮まつた。被害は軽傷者が5名と、本棚の棚から数冊本が落ちただけで済んだ。

「まったく、おまえらはなんでこんなに暴れられるんだ。暴れるなら校庭に行け。」

ちなみに今回の件で探偵俱楽部はおどりつぶしかと思われたが、

そもそもその発端が部活動と関係ないというのと、暴動の中に生徒会員（これは謙一のこと）が入っていたので、暴動事件の詳しい事を黙っているという条件で、今回の件は不問にされた。あ～神様、仏様、生徒会長様である。ありがたや、ありがたや。

「ありがたやじゃない……！」

図書室の先生、とうとう切れるが僕と恵はまだ平気（周りはとんでもなくびくびくしているが）。なぜならそれよりもっと怖い存在を知っているからだ。ソレについてはまた今度にでも。

下校中 b y 謙一

「あ～なんか疲れた。」

「ほんとだるい。」

「もう図書室に行けないかも……」

「…生徒会首にならないかな？」

上から匠、恵、友也、僕である。あの後僕たちは一度と図書室で暴れないことと書かれた誓約書にサインして、今帰宅途中である。しかしながらあんな事をしたか自分でもわからん。ただもう一度と生徒会室に入れないのかなと考えてしまう。

「あ～、生徒会長があの件は不問にしてあげるって。」

…よかつた。

「あつそうだ。明日テスト前休みだからみんなで勉強会しようよ。勉強会か、いい案だな恵。みんなでやればいろいろと苦手克服出来るだろうし、第一勉強しないで百点取るやつがいるもんな。」

「でも僕も人並みに勉強はするよ。ただ昔抜き打ちテストがあった時百点取つただけで。」

そういう事か。

「いや、それでもすげえよ。」

友也の言つ事も一理ある。

「でも恵だつて同じ抜き打ちテストでクラス2位とつたじゃん。」

「おまえらすげえな。」

ホントにこの兄妹はなんでもパーフェクトだな。話によると家事もすべてこなすらしい。友也の言つどおりおまえらすげえだ。

謙一 side 終了

翌日

「「おじやましま～す。」」

一人が学校鞄抱えてやつてきた。

「「いらっしゃ～い。」」

「しかしおまえんち、相変わらず広いな。」

謙一の言つ事はもつともだ。僕の家はじいちやんがこのあたりの地主だつた関係でいえが大きい。ついでに友也は果然としている。まあそんなこんなで僕の部屋です。友也と謙一は部屋に着くなり周りをきょろきょろ見回す。

「なにがあつた？」

「いや、男子の部屋は散らかっているのが定番だからさ。」

失敬だな。毎日部屋の掃除は欠かさないぞ。

「クラスの友達がギャルゲー持つてたんて持つてるんじゃないかな」と。

持つてねえ。なんで二次元で恋愛なのだ。第一僕自身恋愛は現実のカップルがおもしろい。僕自身はやらないけど」（#は伏字）のあのカップルはいい。

「何の話？」

友也と謙一が首をかしげる。

「ん、まあ遼佑先輩と唯先輩の挙式は是非呼んで欲しいなと思つただけ。」

「一人とも？」を頭に浮かべる。

「あつ、挙式は大学卒業後だつて。」「そういえばそんだつた。ついでに一人は？」を30個ぐらい頭に浮かべることだろう。まあ気にするな。いずれかわかる。

「「」」はXを代入して…」

「「」」の原子とこの原子が…」

現在勉強会は何も問題なく進む。ほとんど僕と恵が一人がわからぬ所や苦手な所教えてたまに友也が時事問題を、謙一が地理と歴史を教えている。まあそんなこんなで勉強会は終わってしまった。

「おい作者。もっと描写しろよ。」

『何書けって言つただよ。』

「それもそうだが、考えろよ。」

『いいじゃん』

「あんまり良くないぞ」

勉強会が終わると僕らはのんびりおしゃべりを始めた。

「僕は昔から付き合いがある幼馴染つていいないんだよね。」

「謙一君は小学校からだしね。」

「僕は昔から付き合いのある友達がまったくいなくてさ、探偵俱楽部入つて良かつたよ。」

「僕はクラス名簿見たとき驚いたよ。樽山という苗字があつたからね。もっともこいつはあんまり覚えてなかつたけど。」

「ごめんごめん。」

「そういえば3人はどういうきさつで知り合つたの？」

「小学校でいじめられてやつを助けたらそれが謙一だつたんだよ。いまじゃ喧嘩強いけどさ。」

「おまえにはかなわないよ。だつて第三中の守護神ゴールキーパーといえばお前有名だつたし。」

「えつ、匠「ゴールキーパー」だつたの！？」

「兄ちゃんこのあたりの不良にとても怖がれていたからね。」

「てかなんで友也が知つているの？」

「だつて第一中の不良を一分で追い払つた奴ですから。」

「まあんな事言つたら謙一も怖いぞ。なつ第一中の親分。」

「それを言つな。」

「「えつ、謙一は第一中の親分だつたの？」

「そうだよ。こいつは第一中の生徒会長までしてその裏で第一中の不良を従えていた第一中の親分だぞ。」

「まあいいけどさ。」

まあそんな話をして僕らは解散となつた。テストではみんなクラストップに入るほどの成績で、学年では1位僕、2位恵、3位謙一、4位友也という順番になり、みんな全教科90点以上（僕は全科百点）をとるという快挙を成し遂げました。めでたしめでたし。

余談だがこの結果を受けて東大卒業を鼻にかけて生徒にいじわるするのが好きな先生が、悔しがつて僕に東大入試レベルだという問題をノーヒントで出して僕があつさり解いた為、しばらく授業が成り立たなかつた話はまた別の機会に。

5話 テスト前（後書き）

匠「僕と恵は部屋は毎日掃除するけど、ホンキは？」

ホンキ「やつていません。」

恵「…威張る」と、やなこいじょう。

6話 反抗（生徒会室襲撃事件）（前書き）

匠「なぜこじらな話を作る。」

ノンキ「いやーなんか作りたくなつてね。」

恵「まつたく、警察まで出してくるなんていくなんなのよ。」

ノンキ「ネタばらしあるなよ。」

6話 反抗（生徒会室襲撃事件）

期末試験も終わりまつたり平和な日々を過ぎる探偵俱楽部一同。いや〜、クーラーは人類の偉大なる発明品の一つだね。

季節は6月最終日。夏休みをあとどれくらいだろうとクーラーのきいた涼しい図書室で早くも数えてしまふ僕は罪作りな奴だろうか。クーラーをここまで強調しているのは簡単だ。外がとてもなく暑いのだ。期末試験が始まる頃に梅雨が明けた。梅雨が明けたとたんに太陽が仕事量を増加させた。勘弁してほしい。

現在外の気温は携帯の情報によると31℃。死ななくともしばらく外でたらインドア派の死体ができる。よく運動部で死者が出ないと感心する。外をちらつと見ると陸上部や野球部、軟式野球同好会がグラウンドを走り回っている。そのそばではまくら投げ同好会がまくらを楽しそうに投げ合つており、その近くでは柔道部が正座をしている。う〜んどこのクラブも見るからに暑そうだ。熱中症にだけはご注意ください。

と思つたら校庭の隅に生えている大きな桜の木の下で何人か横になつてゐる。あれは熱中症患者だろう。ちなみに余談だが作者はこの夏に軽い熱中症になつた。本人曰くとてつもなく頭が痛かつたらしい。

『みなさんも熱中症には気をつけましょ』 by 作者

しゃしゃりでるな馬鹿作者。第一時期的にもう遅いわ。ところでこの大きな桜の木は柵の台の桜の名所の一つだ。樹齢はたしか70年を超えるとか超えないとか。ただ父さんと母さんが生まれたときにはこの桜はこのあたりの名所といわれるようになつたらしい。まあのあたりでお花見するなら学校から歩いて10分ほどの距離にある高台が一番の名所だ。

「そついえばこの学校つて生徒会が特殊ですよね。」

「話変えるな友也。あとそれは今更だろ。この学校の生徒会は確かに特殊で一年生も4月から希望すれば雑用係じゅうようきに就く事が出来、実力次第では最終的に生徒会長までなる事も出来る。現に謙一はそこに入つたが、実力でこの間幹部候補生に上り詰めた。

ちなみにこの生徒会の階級は

生徒会長じゅうとくわいな 副生徒会長ふじゅうとくわいな 書記しょき 生徒会組織内各部長じゅうとくわいしきうちかくぶな 幹部候補生かんぶこうしやう 雜用係

とまあ大雑把に説明するところな感じだ。生徒会組織といつのは簡単にいえば生徒会内の仕事を分担したものだ。予算部では予算決定するし、監査部では生徒会内や部活内の監視等を行う。余談だが謙一は部活管理部という部活を管理する部署に所属している。生徒会長は毎年9月に生徒会組織内で選挙を行う。ただ生徒会内は派閥とかあつてそれほど民主主義な選挙は行えないとか。

「この学校の生徒会つて、ほんと複雑でドロドロよね。」

恵の言つ通りだ。第一この学校は教師が生徒会に対してほつたらかしだ。そのため生徒会組織やクラブがややこしくなる。まったくこの学校の校風は『生徒の自主性』だが、『野放し・やり放題』に変えたほうがいいんじゃないかと思う。やれやれ。

「まあともかく、残り少ない一学期をどう過ごすか?」

「…普通に頑張ろうよ。」

まあそんなのんびりまつたりした空氣の中、謙一が図書室に飛び込んできた。

「どうした謙一。そんな青い顔して。」

「みんな、いいから来て。」

何かあつたのだろうか?まあともかく謙一についていく事にした。

「これば…」

「ひどい…」

「何があつたんだ…」

上から友也、恵、僕である。しかしそれ以外言いようがない悲惨さだ。

謙一について来てと言われてやつてきたのは廊下の端つこにある空き教室を使った生徒会室だ。その生徒会室の中は、まるで台風とハリケーンと竜巻が通り過ぎたみたい（少し言い過ぎたかも）にメチャクチャだつた。窓が割れて、机が転がり、その上や床には書類とガラスが散らばつている。棚と言う棚は壊され、倒されている。床のあちらこちらに人が倒れ、少し血が出ている人もいる。けが人はこの様子ならまだ軽傷だと思うが、気絶をしている。

「謙一。いつたい何があつた。」

「実は僕もよくわからない。ただ授業が終わつた後にちょっと野暮用を済ませてここに来たら、すでにこんな状況で。」

「そうか分かんないか。しかしそれじゃあ犯人の目星も見当がつかないな。」

「あつ、犯人は分かるかもしれない。」

「嘘つ。なんでわかるの？」

「実は去年からの申し送りの中に、反生徒会組織があつて、その連中には気をつけろという内容の伝達を受けたんだよ。」

「そんな組織この学校にあつたんだ。てかそれよりこのこと先生に伝えたのか？」

「伝えたよ。そのあとお前らを呼び出した。」

「そうか。とその時にどたどたと音が後ろからするから振り返ると、風紀委員と治安維持部と先生と警察官と救急隊員が来た。僕らは生徒会室から追い出され、ただまつて生徒会室に立ち入り禁止のテープが張られているのを見ていただけだつた。」

7話 反抗（ピラニアの如く）

警察署。善良な一般市民ならまずこんなところは来ない……てか来たくない。せいぜい道に迷つて交番行くだけにしてほしいと思うが僕と恵は諸事情によりこここの警察署の人と顔見知りだつたりする。その諸事情は……うんまあ話す時は近いかも。

さて現在僕ら4人は警察署の取調室……ではなく応接室に通された。「なぜここに？」

「つか僕らどうしてここにいるの？」

当り前だろう。現場の前にいたらそりや事件関係者だと思われるよ。でも取り調べだつたら取調室に行かされるはずだ。やっぱりあれが原因か？

そんな事を考えていると応接室のドアが開いた。てかよく見たら「いよいよ」。生徒会室の前でボケつとしてた生徒って誰かと思ったら匠に恵じやねえか。ゲンキしてたかー？つかオヤジさんとお袋さんはゲンキしてるかー？」

でた。このハイテンションを絵にして額に入れて美術館に飾ったような人が。今この場であつたら1週間分の疲れを一気に感じさせるような人が。さつきの悲惨な状況を一千万光年先の果てまで飛ばしそうな人が。恵を見るとやつぱりげつそりしている。友也と謙一はぎょっとしてそれから僕と恵を見ている。

須藤浩太。柵の台署の刑事だ。母さんが柵の台署の刑事課にいた時知り合つたが、この時から会話しただけで疲れる人だつた。

今まで黙つてたが僕の両親は警察官である。といつても父さんは国際捜査官として世界中を飛び回つてゐるし、母さんは東京の警察庁に単身赴任で行つてゐる。警察の人と顔見知りなのはそれが原因だ。このあいだ母さんは海外出張していると言つたが最近になって日本に帰り、そのまま警察署に行つたらしい。帰ってきたなんなら家に戻ればいいのに。

「父さんは海外飛び回っているのでわかりません。母さんはいま警察庁にいます。帰つたら家に帰つてもいいと思いますけど。」「なあんだ、会つてないのか。」

つか、僕らが最後に会つたの中学3年に上がる時だ。ホントに放任だから困つたもんだ。

「匠、この人は？」

友也が聞いてくる。まあ知らないで当然だな。

「母さんがここに刑事やつてたんだけどその同僚。」

「あれ、お前の母さんって警察官なんだ。」

「父さんもそうだよ。いま国際捜査官だけど。」

「すげーな、お前の両親！！」

まあこんな話はいいからとつとつ話を進めよう。

「えつと、まづ野島謙一君が第一発見者だという事だね。」「はい。」

「で、匠と恵と石田智成君が彼に呼ばれて行つたわけだ。」「はい。」

「ところで謙一君。君が最初に現場を見た時と2回目に現場を見た時で違う事があつた？」

「いえ、ありませんでした。あつ、でも……」

「なんかあつたの？」

「いや、なんか最初に生徒会室を見たとき、なんか違和感があつたんですね。」

「違和感？」

「なんかどこかが違つとなつた気がしたんですけど……すいませんよくわからないです。」

その後、僕らはいくつか質問をされて帰つた。

『次のニュースです。昨日午後3時半ごろ、# # 県 # # 市にある柵の台高校の生徒会室で、何者かが生徒会室に侵入し、荒らされたのを同校の生徒が発見しました。この時室内にいた5人が負傷していましたが幸い全員軽傷だという事です。警察では、外部犯・内部犯両面で調べを進めています。』

「なんか早速ニュースになつているね。」

「うん…」

朝の樽山家。今日の朝食の当番は恵なので、恵が作つた朝ごはんを食べながらニュースを見ていた。あんな事件があつたので今日からしばらく休校になるらしい。

「どうしたの、事件の事考えていた？」

「ぱーつとしてたので心配したのだろうか。

「うん。今日は休校だけど友也と謙一をそつて学校行こうかなと思つてね。」

「まあそうね。」

てな訳で朝食を食べ終わつた僕らは携帯メールで招集をかけると、学校に向かつた（ただ謙一は生徒会で緊急会議があるそつでもう学校に行つているとのことだった）。

恵には話さなかつたが僕には不思議に思つたことがあつた。

犯人はそこまでして何がしたかったのだろうか？

あれで事件は終わりだろ？

解決すればいつもの日常が戻るだろ？

答えはいまだに出ない。

学校に来た僕ら3人を待っていたのはとても多い数の報道陣と野

次馬だった。

「うわ〜。」

「ヒマ人が多いのね。」

「すげー野次馬。」

ともかく人が多くて学校に入れるだろうかと心配になつた。
と思ったらカメラとか記者たちがピラニアの如く僕らの周りをぐ
るりと回つた。

「今回の事件どう思いますか！？」

「犯人は反生徒会組織だと言われていますが！？」

「自分の学校でこんな恐ろしい事があつた事に対して感想を！」

「一言何か！」

…すこし政治家の気持ちがわかつたかも。警備員の人來てもし
ばらく身動きが出来ず、結局この集団から抜けられたのは8分23
秒後だった。

しかし記者たちつてデリカシーがないね。もっとおとなしく訊けばいいのに。

デリカシーのない子供が増えてると言つがまず大人がこんな状態
だからじゃないかと思う。

「あれ、友也君は？」

あれ、いない。

「たすけて〜」

…まだあそこにいた。また疲れそうだ。

事件の手がかりを探しに来たのにこの調子で大丈夫だろうか？
心配…。

7話 反抗（ムカシの母）（後書き）

ノンキ「君の話はあとで話べりこ続くと思います。」

匠「ながー。」

恵「読者の面様。飽きたらと思いますがどうか最後までお付き合いくただける方は『じょうがねえな〜』とももって諦めて下され。」

8 話 反抗（捜査の始まりはじまり）（前書き）

ノンキ「なんか今回限り盤場（予定）のキャラを出しました。たぶんやう出ないと思います。」

匠・恵「ならだすな。」

8話 反抗（捜査の始まりはいつ？）

友也を救出したのはそれから2分49秒後だつた。

「ひどい田に会つた…」

同情します。てかこっちもひどい田にあつた。

「…お疲れ様。」

謙一がこっちを見て同情した田を向ける。たのむからやめてくれ。その視線が痛い。

「でも結構来る人多いんだね。」

確かにこの学校に来る人は多い。現に今も制服着た人が校門をくぐりうとしている（そして記者からの質問攻めという洗礼を受ける）。

「やつぱりみんな事件は怖いけど、それに負けてるそぶりは見せないらしいよ。」

ふ〜ん。と感心してたら大事な事を思い出した。

「つかお前、会議はいいのか！？」

「さつき終わつたよ。」

ふ〜ん。じやあまず現場を見ますか。

「まあ当たり前だろ？な。」

「うん当たり前。」

「予測通りだ。」

謙一と別れ、現場に着いた僕たちを待つていたのは多数の野次馬だった。その野次馬は警察官に追い返されようとしている。

「ミステリー研究会の連中がなんかわめいているよ。なんだろうか？野次馬をかき分けて進むと

「だから、この事件はぼくらミス研に任せて下さい。」

「これは遊びじゃないんだ。邪魔をしないで。」

まあミス研と警察官が言い争っているが、悪いのはミス研の方だ。

「おや、君たちは探偵俱楽部じゃないか。」

さつきから言い争っていた人たちの中で、メガネをかけている人がこつちに話しかけた。

「そうですけど。あなた誰?」

「俺は遠藤利明。ミス研の会長で3年学年トップである。」

「そうですか。」

「君たちもこここの捜査かな?」

「似たようなものです。」

「残念ながらここはミス研の管轄だ。関係ないものは出て行つても
らいたい。」

(((これは警察の管轄だろーーー)))

突っ込みたかったがそこは我慢した。てか嫌味なやつだな。学年
トップだつて言つけどこつちだつてそつだ。

「あれー? 匠に恵に友也君じやないか。どうしたー?」
「あれ? って浩太さんがいた。」

「いや、現場がどうなつてているのか見に来ただけですけど。」

「おまえ、知り合いか。」

「うわ、利明先輩が来た。まあこの人はスルーしよう。
嫌味ヤロウ

「ふーん。まあいいや。少し見てくかい?」

「えつ、いいんですか?」

「いいよ、いいよ。」

友也驚いて尋ねるが、浩太さんが許可する。

「ちょっと待て、いいのかよ。署長のうちのパパが許さないぞ。」

「この年でまだパパと呼ぶのか、このヒト。」

「大丈夫。匠と恵のお母さんに許可申請するから。」

「許可する訳無いでしょ?...」

「許可下りたよ。匠と恵と友也君に僕が付いていくという条件と、
証拠に触らないという条件で。」

この人、最初から入れるつもりで既に手を打つたんだな。

「すごいですね。さすが警察庁に勤めるだけあって。」

うん、すごい。ついでにうるさい人はポカンと口を開けているだけ。

「さあはいろいろ。」

テープをぐぐつた時に後ろからぶつぶつ何か聞こえてきて、それが呪いの言葉だった気がするが、気にしないでおこづ。

鑑識の人や捜査中の刑事たちに頭を下げて、僕は生徒会室に入った。昨日あれだけあつた紙はみんな証拠として持つて行つたんだろう。ひっくり返つた机と、倒された棚がそのまま残つていた。

「大体持つて行つちやつたからもう何も残つてないけどね。」

てかただの暴力事件にそれほど何もないと思う。犯人は分からなければ。

「そういえば友也君が昨日何か言い淀んでいたけど、何だつたんだろ？？」

そういえばなにか言い淀んでいたよな。何だつたんだろう？

「どうか、あの下つ端はあの事知つていてるんだよな。まあいい。それよりあの素人探偵にどこまで出来るか見ものだがな。」

8 話 反抗（捜査の始まりはいつ？）（後書き）

匠「今回もぐだぐだだねえ。」

恵「それよりいつ捜査始めるのよ。」

ノンキ「次の話から。」

9 話 反抗（暴闘）（前編）

「ホンキ！ さすがに脱だつ出だすぞ！」

匠「ホントの話はこいつ終わるんだからや。」

恵「わかった。」

9話 反抗（尋問）

「いいか匠と恵。犯人は自白するときかならず喉を鳴らし、飲み物を飲む。そこで飲むと自白の言葉を飲み込むんだ。」

そういうと父さんは僕らの頭の上に手を置くとこづ締めくくつた。「だから自白させる時は飲み物を飲ませてはダメだぞ。」

小学生の頃、なんかどこかの探偵マンガと同じセリフを父さんが言つてた。ていうかそのまんまだつたよ。当時の僕はそのマンガ読んで真似ているんじやないかと思つてた。

まあそんな昔話はどうでもいい。でも知つた所で絶対使わないと思つていたが、まさか数年後に実践するとは思わなかつたぞ。

現在の状況は生徒会室の隣の教室で、机を寄せ合つて謙一に尋問中。尋問は僕、後ろに恵と友也と浩太さんが立つていて。

「…………」

謙一は終始無言。さつきから喉を鳴らしてたんで、飲み物を与えたたら全く言わなくなつた。自白ではないとはい、喋りたくないのだろうか？

「謙一、別に話したくなれば別に話さないでいい。ただ話さなければ話すまでこうするだけだからな。」

なんか嫌な役だな、尋問する側つて。なんか脅迫して意地でも話させようつて言つのがなんか好きじゃない。でもまあ仕方がないことだらう。

「…………」

それでも無言。

「…………」

相手が無言ならこいつちも無言でいるのみ。さすがに第一中の親分と言つだけあつて忍耐力はある。でもこいつは刑事デカの息子だ。忍耐力は負けてられない。

「違和感つて言つほどではないんですけど…」

「おっ、話し始めた。」

「今まで反生徒会組織という組織があるとは聞いてたんですけど、実際にそういう連中がいるとは思わなかつたんですね。」

「なんで？」

「反生徒会組織と言う割には活動はしないから、神道先輩がうそついているんじゃないかとずつと思つてたんで…」

「神道先輩？ 誰だそれ。」

まあ浩太さんは知らないよな。神道先輩は柵の丘高校に人居る、生徒会副会長の一人で、神道派のトップだ。生徒会の中でもあまりいい噂は無いらしい。

「まあそんなわけで今日まで3か月しか生徒会で働いてないけど、今までの記録に派手な組織運動は無かつたから存在しないと思ったんだよ。」

「ふうん。でもなんで生徒会は調べなかつたの？ 存在を調べようと思えば調べられたじゃん。」

「今まで調べなかつたのは、つい最近 って言つても去年だけどいきなり出来たらしいから、あまり調べる暇がなかつたし、もう一つは上から圧力がかかつてその辺の捜査を打ち切られたらしいよ。」

「それじゃあ幽霊組織つて言う事じやん。」

… 惠のツッコミがなんだか随分久しぶりに見える。

「上の圧力つて、どこから？」

「よくは分からぬけど、噂だと副会長ぐらうのポストの人間だつて。」

「副会长か。それじゃあやる事は一つだな。」

「何するの？」

友也よ。まずは聞き込みだろ。一人いる生徒会副会長に聞き込みだよ。

「… 」

という訳で（何がという訳でかはわからないが）本格的に捜査を始める事にした。

9話 反抗（尋問）（後書き）

匠「毎回思つんだけじゃ。」

ノンキ「何?」

匠「この小説の中身話短いよね。」

ノンキ「うう」ぐわわ

恵「それに無理やり終わらせてこるし。」

ノンキ「ぐう……」ぐわわ

ノンキ「六甲水先生に書いて戴いている『ワボ作品もできれば読んでください』。面白いです。」

匠「そつ思つんだつたら執筆活動に参加しろよ。」

恵「これしかしないなんて最低だよ。」

ノンキ「…………

匠・恵「黙秘權つかうなーー。」

連載無期限休止

毎度、「樽山匠のにぎやかな日常」を読んで戴き
ありがとうございます。

誠に身勝手ながら、この作品の連載を休止させて戴きます。
理由はこれを書き続けるためのネタがないからです。
こんな理由で連載休止はあきれるでしょうが…
自分でもあきれる理由で申し訳ございませんが
復活まで長くお待ちください。
復活は告知なしで行います。

六甲水先生も

コラボ作品を書いて戴いている中
申し訳ございません。

出来るだけ年内復活を目指します。

10話 反抗（求めるわけは）（前書き）

ノンキ「1ヶ月半もの間音信普通ですいません。」

匠「大丈夫、誰も心配しないから。」

恵「兄ちゃん心配する人自体、今のノンキに居ないって。」

ノンキ「……おね。」

10話 反抗（求めるわけは）

生徒会の副会長は生徒会室にぽいなかつたが、資料室で見つける事が出来た。

「知らねえな、そんなこと言つた覚えもない。」

見た目はまあ、ちょいカッコイイ不良といえばわかるだろ？
よくこれでまあ選挙で勝てたもんだと少し感心してしまう。まあそれはともかくだ。

「逆にそんなことを言つたといつ証拠を持つてこよ。」

中身はそのまんま不良だなとつっこみたい。

ともかく証拠がない以上追及する事は出来ないので、後片付けをする謙一は置いといて、とりあえず警察署へ行くことにした（昼飯は抜き！）。

「進展はほとんどないなあ。まあ神道という奴を叩けば一つや二つ出てくるんだろうが、証拠もない今勝手に取り調べする訳にはいかないからな。」

想像通りの回答ありがとひげこります。

こうして一ヶ月が過ぎたが進展はまったく無かった。警察も証拠がなければ動けないし、マスクミの関心も薄れてきた今となつてはもう誰も言わないだろ？

校長も今回の件に関しては早く忘れたようだ。生徒も自主退学した一部生徒を除いて普段通りの生活に戻つた。

こうして今回の事件は迷宮入りをはたし、もう一度と操作をする者はいなくなつた。

んな訳ねえだらう！！！！

おい腐れ作者、こんなもの書いてるんだつたら辞めちまえ。

「いや、辞めるつもりないから。」

黙つて連載休止したやつが言つんじゃねえ！！！！！！

「と言つて捜査を続けます。」

「続けるも何も事件翌日じゃん。」

友也よ、そういう事は言わない約束だ。

「でも、捜査方針どうするの、兄ちゃん？証拠は無いんだよ？」

たしかに証拠は無い。ただ僕は真実を知りたい。そりや犯人を警察に送る事も大事だ。でもそれ以上に真実の追求が、大事なことだと僕は思う。

「…わかつたよ匠。こつちもいろいろハ方手を廻くすよ。といひで警察は何をすればいい？」

「まず神道先輩の口座を洗つて下せい。あれだけやるには人手がいるでしようから。」

浩太さんに警察で出来る事を任せると僕らは警察署を出た。

「どこに行くんだ匠？」

「兄ちゃん何処へ行くつもりなの？」

「被害者の意識が回復したからどんな事があつたか聞いつと思つて。

「警察が聞いているんじやない？」

まあその暗い予測はつく。でも

「僕も聞いてみたいんだよ。といひで一人とも来る？」

「人に話を振るとにやりと笑つて

「「もちろん。」

と答えた。

僕はその結果に満足すると、一人を従え、被害者がいる病院へ向かつた。

探偵俱楽部は諦めない。

眞実と言つ名の「ゴールが

その先にあるのならば。

10話 反抗（求めるわけは）（後書き）

年内再開と言つた無茶な事を言つてしませんでした。とくに六甲水先生には多大なる迷惑をかけた事を心より謝罪します。これからも「樽山匠のにぎやかな口常」をよろしくお願いします。

1-1話 反抗（驚愕の事実）（前書き）

ノンキ「なんか無茶苦茶な話になつた気がする。」

匠「その理由は、今まで小説を放置したためにキャラ設定を忘れてるからだ。」

恵「あとト糞だからとこいつのもあるよね。」

ノンキ「ひでーなおまえら。」

匠「感想まつてま～す。」

1-1話 反抗（驚愕の事実）

病院についた僕らはまず刑事に止められたが、浩太さんに連絡をもらっていたのか名前を言つとすんなり通してくれたうえに、病室まで案内してくれた。

「匠と恵は警察にコネを持つていてるから良かつたけど、持つてなかつたらどうするつもりだったんだ?」

「「え?」」

この回答にはあきれたようだ。まあいいけど…。

「被害者たちは田を覚ましたが、よほビショックだったのかあまり話さうとしません。どうかあまり刺激しないようこじて下さい。」

「おい作者。いきなり話変えたら読者に気付かないだらしく。まつたく。

ともかく刑事さんの案内で病室についた僕らは被害者に会つ事が出来た(もちろんノックはしたよ)。

「今は答えたくないません。申し訳ございませんが。」

イキナリ玉砕デスカ。…なぜカタカナのが分からんが。まあ質問の形が悪かったかもしれないというのを認める。いきなり「事件について聞かせて下さい。」じゃあ誰も話したくなるな。

でもここであきらめたらここまで来た意味がない。

と言つて(何が「と言つて」かは知らないが)、質問の形を変えてみる事にした。

「生徒会やつて何年経ちますか?」

皆(刑事さん含め)が「へ?」って顔をしているが知ったことかぢゃない…つて何かやらかしたみたいな言い方だな。

「まだ雑用係なんで一年目です。」

と言ふ事は先輩か。

「生徒会の仕事って忙しいじゃないですか。いつもは何やつているんですか？」

「部長クラスになると、暇になるらしいですよ。雑用係は生徒会の会議での書類整理や資料作成など忙しいですが。」

「お茶くみなんかもしますか？」

「お茶くみはしますよ。みんな好みが違うので、お茶を用意するのが大変で。」

「神道先輩なんかの時は大変じゃないですか？なんか不良って感じなので。」

すると被害者（もう「少女A」でいいか？）が「とんでもない！」

という顔をした。

「神道先輩は見た目や口調からいろいろ言われますけど、実際は生徒や学校の事を生徒会の中で一番考えている人なんですよ。」

初耳だ。そんなこと知らなかつた。

「生徒副会長になつたのも、お金をばらまいたからだとか言われますが、実際は生徒会の中で一番支持されている人で…あつ！？」
なにかしまつたつて顔をしているが何かあつたのだろうか？
「すいません、今のは他人に言わないでください。」

「何で？」

「この事は生徒会の中でタブーだつたんです。会長の指示で」
意味不明だ。しかし困つた、これでは何も聞けなさそうだ。仕方ないから僕らは退散するが、その前に一つ聞こう。

「おまえら黙つているけど訊きたい事無いの？」
今まで何も話さなかつた恵と友也に。

「いきなり話振る！？」

お前ら用意しとけ。僕だけに任せんな。

「じ、じゃあ一つあるんですけど。」

友也は用意していたのか。

「さつさんの話聞いてたら思つたんですけど、神道先輩は生徒の事を
考えているんですね。」

「ええ。」

「じゃあ、今回の事件は神道先輩がやつたと思こますか？」
すると少女Aはしばらく考えてから言った。
「少なくとも、私はさう思いません。」

1-1話 反抗（驚愕の事実）（後書き）

想像もしなかつた事実が判明し、探偵俱楽部に衝撃が走る。
果たして眞実に辿りつく事は出来るのか！？
次回は会長に対しても聞き込みをします。
どうぞお楽しみに。

匠「変更しないようにな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3843n/>

樽山匠のにぎやかな日常

2011年1月23日03時25分発行